

私の一冊

歯科衛生学科 長谷 由紀子 先生

小川糸 著 『ツバキ文具店』

小鹿図書館 908/1 95

最近、友達や恋人、家族に手紙で想いを伝えたことがありましたか？スマホで簡単に連絡が取れ、メッセージを送れる時代、「手紙」を書くことが少なくなったのではないのでしょうか。

本の題名となっている「ツバキ文具店」は海や山、自然に囲まれた古都・鎌倉にある物語の主人公、鳩子が営む小さな文具店です。鳩子は文具店を営む傍ら、手紙の代書屋もしています。

鳩子は依頼者に代わって手紙を書くために、依頼者の本当に伝えたい想いや相手がどのような方なのか、どのような関係なのかを依頼者に寄り添いながら聴きます。もちろん“代書”をお願いするのですから「絶縁状」や「借金のお断り」、「天国からの手紙」など厄介な依頼者、厄介な依頼も多いのですが、鳩子は依頼者の想いを伝えるために、全力をかけて手紙を書きます。その仕事ぶりは繊細です。依頼者の想いを表現するための便せん、封筒、筆記具を選び、そして字体までも変えていきます。これぞプロフェッショナルの代書屋です。

鳩子は幼少期に母親に捨てられ、ツバキ文具店の先代である祖母に育てられました。思春期に祖母の厳格さから仲たがいをし疎遠となり、祖母の最期に立ち会えなかったことを後悔しています。しかし、鳩子は祖母の死後にツバキ文具店を継ぎます。鳩子にも先代に伝えたくても伝えられない想いがあるからこそできる仕事なのかもしれません。

人に想いを伝えるって難しいですね。ましてや人の想いなんて…。鳩子が依頼者の心に寄り添い、どのような便せん、筆記具を使い、どのように依頼者の想いを表現するのかわくわくしながら話を読み進めました。また、手紙を読んだ相手がどのような反応をするのか、想いが伝わるのか…。挿絵として鳩子を書いた全ての手紙も載っています。温かみのある鳩子の字、ときには大胆な字、想いを込めて書かれた手紙は相手に直球で伝わるような気がしました。

だれかと共に生きている私たちは鳩子から想いに寄り添う、想いを伝えるということのヒントを教えてもらえるのではないのでしょうか。読み終えた後に誰かにその人を想って手紙を書きたくなるかもしれません。

また、物語の舞台となった鎌倉の街の風景も詳細に書かれており、自然豊かでほのぼのと

した古都・鎌倉をきっと訪れたくなるでしょう。